

『靖国神社遺児参拝文集』（大阪府）を読む

一九五〇年代の靖国神社遺児参拝（11）

松岡 勲

はじめに

靖国神社遺児参拝文集『靖国の父を訪ねて』（第一二集）を再発見してもう七年になりました。収集してきた『靖国神社遺児参拝文集』（大阪府）を今回やっと読み終わりました。具体的には『靖国の父を訪ねて』第一集、第五集、第一〇集、第一二集の全四巻です。

一九五二年のサンフランシスコ講和条約発効後、戦没者遺児の靖国神社集団参拝が一九五〇年代を通じて全国的に行われました。都道府県・市町村が戦没者の遺族会へ委託した事業でした。私は一九五八年に参拝に参加しました。丁度、警察予備隊、保安隊、自衛隊の創設と日本の再軍備が進む時代で、日本の「独立」を契機に戦没者遺児の「靖国神社参拝」を堂々と行ったものでした。私はこの遺児集団参拝を調べて来ましたが、これまで収集してきた『靖国文集』を何度も読み切ろうとしましたが、挫折してきました。その訳は靖国神社に参拝した中学三年生当時に書いた私の作文に強い「抵抗感」があったからです。私の感想のタイトルは「もう一度行こう靖国へ」となっており、「私はなんとなく父は立派な死に方をしたんだなあと思った。」と書いています。

靖国神社は戦死した父や兄たちを国のため命を捧げた「英霊」として讃え、いざ戦争となれば、遺児たちを戦争へ動員する役割を歴史的に果たしてきました。その「教化」イデオロギーに強染め上げられ、書かされたとしか言えない子どもたちの文章をなかなか読み切ることができませんでした。しかし、今回は『靖国文集』を読み切ることができました。私の『靖国文集』に対する姿勢を「当時この文章を書いた子どもたちと私は同じところにはたではないか」と、感じ方を切りかえることで、読み切ることができたのでした。以下、『靖国文集』を父や兄の戦死と戦後の母や兄妹との生活、貧しさと寂しさと哀しさを抱えて育った子どもたちと私は同世代であるという感覚で読み取っていきたいと思います。

〈今回読んだ靖国遺児参拝文集『靖国の父を訪ねて』（大阪府）〉

「第一集」（一九五三年一月三〇日刊。第二回・一九五二年一月二五日〜二八日）

* 「第二集」（一九五三年九月二五日刊、第三回・一九五三年五月四日〜七日）

* 「第三集」（一九五四年三月二五日刊、第四回・一九五三年一

○月三日〜六日)

「第五集」(一九五五年三月二〇日刊。第六回・一九五四年一月六日〜九日)

* 「第六集」(一九五五年一月三〇日刊、第五回・一九五五年六月七日〜一〇日)

* 「第九集」(一九五七年三月二五日刊。第一〇回・一九五六年一月六日〜九日)

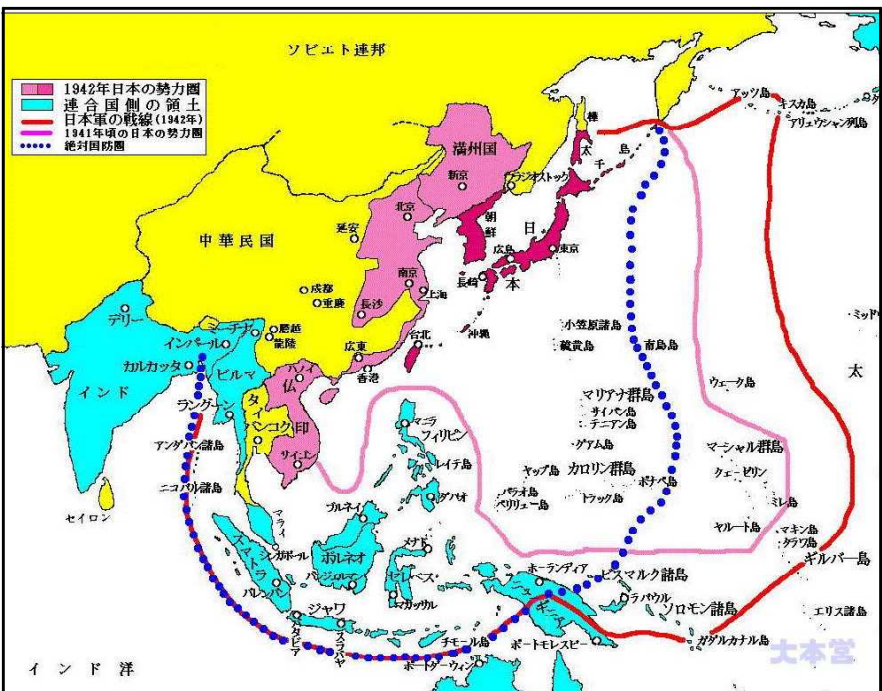
「第一〇集」(一九五七年一〇月三〇日刊。第二一回・一九五七年六月一〇日〜一三日)

「第一二集」(一九五九年三月二〇日刊。第一三回・一九五八年七月二九日〜八月一日)

* 印なしは全巻通読、* 印は部分コピーを読みました。第一集から第九集までは大阪府遺族連盟、第一〇集からは大阪府遺族会発行。(第一二集まで発行が確認できません。)

父や兄たちの広大な戦場

遺児たちの父や兄は太平洋戦争中にアジアの広大な戦場で戦死しました。その六〇％強は病死者、戦時栄養失調症による広い意味での餓死者でした。(藤原彰著『餓死(がし)した英霊たち』青木書店)大阪府の空襲死者数を含む戦没者数は約十二万七千人とのことですが(大阪府福祉部社会援護課、「戦後七一年大阪戦没者追悼式の開催について」、これから空襲死者数約一万三千人(広田純「太平洋戦争におけるわが国の戦争被害」立教経済学研



究、第四五巻第四号、一九九二年)を引くと、大阪府の軍人・軍属の戦没者は約一萬四千人になります。多くの死者たちを背景にして、子どもたちの戦後の生活がありました。

子どもたちの父や兄たちが亡くなったアジア各地の戦場を『靖国文集』から取り出してみます。満州・中国・朝鮮・ソ連・フィリピン・マニラ・レイテ島・ルソン島・マリアナ諸島・トラック島・ラバウル・サイパン島・ニューギニア・フランス領インドシナ・ビルマ（ミヤンマー）、それに沖繩、広島の被爆死等と続きます。戦地に向かう輸送船が米軍機に襲撃され、父が戦死した様子なども書かれています。

母子たちの戦後

『靖国文集』は第一集から第十二集までありますが、前半の巻では父の記憶があります。父と別れた記憶は、集団疎開や空襲の記憶、沖繩・広島の記憶などつながっています。

●「こうした楽しい夢も激しい戦争の為につぶされ、父は軍属として国の為に出征したのです。私はそうした変化もしらず今日は今日へと小さいながらにまっていたのです。昭和十九年十一月、みくこの花と散ってしまったその後、母の手一つで父にはじない子供として育てられたが母は四年前になくなりました。（中略）淋しい時、悲しい時、うれしい時に夜空をながめ、きらめく星を母と思い、父と思い、私は一人ささやくのです。」

〔第一集〕大阪市旭区、手向恵貴子

●「僕がまだ幼い五才の時ですからお顔はよく覚えていませんが、母が亡くなりその上父に召集が来て戦地へたれたとき一度も帰れず、僕はおばあちゃんや、おじいちゃんおばさんの所で、従兄

達と一緒に何不自由なく大きくなりましたが、お父さんの帰かんの日をどんなに待ったでしょう。しかし戦地から届いたハガキに「隆ちゃん元気ですか、お父さんも元気で、しつかり勉強しています。おばあさんの肩をたたいてらくをさせて上げて下さい。」と書いてあったのが最後の手紙で僕へのかたみになりました。」

〔第一集〕大阪市生野区、甚田隆康

●「七歳の時満州で別れ別れになってしまったなつかしい父、雪の満州牡丹江の駅でさようならしたやさしかった父、汽車の窓から手を差し入れて頭をなでてくれた父の手、思い出はつぎつぎとつきない。何かしらふつと胸が一杯になって来た。涙でうるむ目で前を見ると大きな（*靖国神社の）本殿がどっしりとすわっている。」

〔第一集〕枚方市、山内克世

●「思えば幼い時父は戦死、あの苦しかった集団疎開、母と兄は家を守りながら仕事に、学校へかよった。終戦直前家はやけ後に何ものものこらず全部灰になった。その後のインフレーション、世の急げきな変化、走馬燈の様に思い出してはその時の事を考えた。あくる日の朝まだうす暗い時、汽車はいきおいよく東京駅にすべり込んだ。」

〔第一集〕大阪市生野区、田淵稔

●「思えば十数年前、戦争のために戦地に出征なされた父でした。出発する時、僕の頭をあたたかい愛情のこもった手でそつとなでられて去って行かれました。」

〔第五集〕大阪市阿倍野区、須藤徹哉

●「昭和二十年の空襲で大阪のお家は焼けて私達は今枚方にいます。おばあちゃんやお母さんは本当に苦労されました。」

● 「『第五集』枚方市、横川美智子）
あたら沖繩の土にと化した父を思う。」

〔第六集〕 大阪市東区、平井章雄

● 「アメリカがそんな卑怯なもの（*原子爆弾）を落としてくれてなかったら、父は助かったかもしれない。それというのも私の父は広島の子爆弾で亡くなったからである。そんなことを思いながら参拝した。」

〔第十二集〕 大阪市天王寺区、谷本禎子

『靖国文集』の後半の巻になると、子どもたちは父の記憶や思い出はなく、生前の父に顔も見てもらったこともありません。私の場合もそうでした。

● 「僕の父は、僕が生まれてから四カ月目に、内地をたつて大陸へ向かった。そして三年目にサイパン島で戦死されたという知らせが来たのだ。」

〔第六集〕 大阪市西区、池上勇治

● 「私が誕生した時父はすでに戦場へ行っており、その年に死亡したので、私は父の顔を知らない、もちろん思い出もない。幼い頃の私には、友達が父と歩いている姿を見ていじらしく目につき、うらやましく思った事も幾度かあった。戦争で父を失った私は、戦争の事聞きたくない。母もきつと太平洋戦争の事は云いたくないだろう。なぜならば私がもの心ついてから今日まで、母は私に戦争の事を何も話さない。そして父の事ですら口に出さない。」

〔第十集〕 大阪市西淀川区、栗原茂代

● 「ぼくには父、母、おじいちゃんがない。しかしおばあちゃんがいるからいい。ただ父のある友達がうらやましい。（中略）もし戦争がなければ、無言の父ではないし、母もいるだろう。父、母がほしい。しかし今はおばあちゃんに育ててもらっているが、昨年まではおじいちゃんやがいたが、きょうしんしょうで亡くなった。ぼくは今におばあちゃんを楽にしてあげ、父より偉い人になるのだと決心した。」

〔第十二集〕 大阪市西区、姫岡信隆

そして戦後の母子の生活は食べることに欠く苦しい生活であり、悲惨な家族や家庭の実態が分かります。

● 「戦争のため長年住みなれた家を焼き出され、当時小さかった姉弟四人を育てるのに人一倍苦労をした母までこの二年前に永久に帰らぬ人となりました。あとに残された私達にはあまりにも残酷な運命の巡り合わせでした。父さえ無事に帰ってくれたら、戦争さえなかったら、こんなにまでならなかったかもしれないと思うと残念でした。」

〔第一集〕 大阪市西成区、佐々木政次

● 「私の父は昭和十九年九月十三日に戦死しました。あの時私が五才で、妹が三才でした。私の母もまだ二十七歳でした。それから母の実家に帰って苦しい生活を。又母も今まで「こんな美容師になろうなんか思った事がない」事を、私たち親子三人食べて行くために田舎から大阪へ出てきて、小さいながらも天王寺堀越町で美容院を経営しました。初めまだ何も知らない母は、いっしょうけんめいに勉強して、見事試験にパスしました。今でも

う、母の手で四人も試験が通って一人前の美容師に成功していません。」

『第五集』 大阪市浪速区、井山房子

●「母は昭和二十六年六月二十九日、父の帰りを待ちこがれ、その間の疲労と苦勞の為に長い病床につき、この日私達三人を残して病死しました。祖母も我が子の帰りを待ちこがれ、いく日泣いて暮らした事か。我が子の戦死を聞いた時どんなにびつくりした事か。その為に祖母はあまりの驚きに元気な体も一度に弱った事であった。こんな思いをした祖母は老衰の為此の年の八月二十四日に死んでしまった。父も母も祖母もない私達兄弟三人が立派に成長する事を父にもう一度誓った。」

『第五集』 大阪市阿倍野区、岩田光子

●「お母さんはお父様の公報が入った時、まるで一日泣き明かしました。私がちょうど一年の時でした。それから母子の苦勞が始まったのです。お母さんは私を親類にあずけて働きに行き、十二月の真冬に電車が故障なので、十二時頃までかかって歩いて帰ってこられた日もありました。世の荒波にもめげず育ててくださったお母さんに、口では云えないくらい感謝しています。」

『第五集』 大阪市大淀区、巴里美代子

●「お父さんが戦死されてからお母さんの苦しい生活が始まりました。小さい妹や私を抱えて幾夜もねむらず、縫物をしたり、山や田畑に出て口では云う事の出来ない苦しい仕事をして私達を育てて下さいました。お父様の居ない家庭ほど淋しいものはありません。大きく成るに従って、世の人々の冷たい人情がよくわかる様になり、お父様が生きていらっしやったらと思つて、幾度泣いたか知れません。」

『第五集』 大阪市旭区、坂本佐智子

遺児集団参拝はこのように行われた

夜行列車で東京に着いた子どもたちは宿舎に荷物を置いた後、早朝の深閑とした靖国神社に招き寄せられます。竹樋から落ちる冷水に手を清め、拝殿に進み本殿に向かって安座、お祓いを受けます。この時、本殿で神官が祝詞奏上します。男子から昇殿参拝（女子はこの後男子が終わってから昇殿参拝）します。二拝二拍手一拝の後、神官は「前に見える鏡の奥にお扉があり、その奥にさらに小さな御殿があつて、その中に二百五十万柱のみ霊が奉安されています。」と言います。『第十集』 このように神々しい雰囲気は形づくられたなかで「父との対面」が演出されます。さら



に子どもたちの正面に置かれた大鏡に父親の顔が見えると誘導されます。私の書いた『靖国文集』（第十二集）には宮司の言葉が次のように記録されています。「この靖国神社は、お国のために亡くなられたあなたがお父さんや、お兄さんの英霊がお祀りしてあります。此国があるかぎり、あなたがたのお父さんの名は永遠に残るであります。今日も大きくなられた人々が「お父さん、こんなに大きくなりました。」と報告に来られています。皆さんも、もう一度やって来てください。」以下、『靖国文集』からその様子を見てみます。

● 「大きな鏡の前に私達一同は座った。此の鏡の中にお父さんが居る。私はじつと鏡をみつめていた。「お父さん」と、小さくよんだ。目頭があつく来た。あつい涙がほほをつたった。鏡がくもって見えなくなった。」

〔第五集〕大阪市東住吉区、檜田英子

● 「神主さんが「みなさんのおとうさんはこの大鏡の後ろにお祀りしてあります。みんなのお父さんは、お国の為になりっぱに尽くされました。そのお父さんの子どもである皆さんは、何の引け目も感じる事はありません。お父さんがおられないのでさぞおさびしいでしょうが、力強く堂々と生き抜いてください。それではお父さんごゆっくりお話しください。」神主さんのお話が終わり、皆な静かに目を閉じた。」

〔第五集〕大阪市東住吉区、坂本美智子

● 「いよいよ私達が父と無言の対面をするのですが、自分はいったい何を亡き父に言ったらいいのか、先生方（*引率の人のこと）は「りっぱな子になる」とそれだけいえばよいといわれた。」

けれども自分はそれだけを誓う勇氣と自信があるのかと疑ってみました。」

〔第五集〕大阪市東住吉区、徳永紀子

● 「私も顔さえしらない父の霊に心の中で「お父さん！」と叫びながら足の痛いのも忘れ一生懸命祈った。ああ父はあのみにくい戦争の犠牲になった。しかし父は国の為に尽くし、国の為に立派に死んでいった。当時はそれは正しい立派なことであった。そして父もそれを正しい立派な事と信じて立派にこの世を去った。私はその立派な父の子である。誰にもひけをとる事はない。いやそれどころではなく国家の為に尽くした立派な父を持つ事を誇りとし、その父の子としてはずかしくない行いをしなければならぬ。」

〔第一集〕岸和田市、岸田令子

● 「母の話に依ると僕の五歳の時、父は戦争に行かれたそうだ。その時僕はこんなことを言ったらしい。「お父さん、戦争に行ったら鉄砲の玉があたって、死んでしてもや、死んじやったかてかめへん、神さんになってやもの」と。」

〔第一集〕豊能郡、畠中敏行

戦前の靖国神社の役割の役割は、国家が戦争に人々を動員し、戦死した兵士を靖国神社で「英霊」として祀り、戦死者を国家のために死んだと鼓舞し、この人たちが英霊の後に続きなさい、国のために死になさいと繰り返し教育し、次々と兵士を作り出すことにありました。戦後の靖国神社遺児参拝においても同様の作用が働いており、子どもたちをその方向にすり込もうとしたのだと思います。もしあの時、戦争が起こっていたら、子どもたちは銃を持たされていたかも知れません。

一方、「お父さんの姿は見えず、声も聞こえなかった。」という正直な作文もあり、ほっとさせられるとともに、子どもたちの悲しみと切なさを感じます。

●「お父さんに会いに来ました」と心の中でいいました。そして一度でいいから「幸子よくきたね」といってほしかった。だがお父さんの姿も見えず、どこからも声は聞こえてきませんでした。」

〔第一集〕中河内郡、吉村幸子

●「その時ふと父があんな所におられるのだろうか。開けてあげたい。どんな姿であろう、顔も見たい、幼い頃のようにだっこしてもらいたいと思ったが、今はもう何もしてくれない父の姿。お父さんお父さんと言ったってだまっている。そんな事を考えていると涙がこらえられなく、なんであんな戦争をしたの、お父さんをもとの姿で返してと大きい声で云いたくなるほど、悲しくなる。」

〔第十集〕岸和田市、橋本照子

静かであるが、湧き上がる子どもたちの怒り

以上見てきたように靖国神社集団参拝を進めた行政・遺族会のねらいは『靖国文集』全体に貫徹しており、遺児参拝が当時全国的に展開された歴史の意味がよく現れています。にもかかわらず、『靖国文集』のなかには父を亡くした寂しさや哀しさ、そして家族をそのよう境涯に追いこんだ戦争と政治権力に対する静かであ

るが、ふつふつと湧き上がる子どもたちの「怒り」が見られます。そのような声に聞き耳を立てて、書きぬいてみます。

●「私はみんながどんなに成長しても父親の愛情欠乏症は簡単に治らないと云う事を痛切に感じた。そして又自分自身に付いて振り返って見た。小さい時は父親に手を引かれて甘えながら道を往く私と同じ年頃の幸福そうな人々が大変うらやましかった。そして又十六才に成った今でさえも時々その幸福そうな親子を立ち止まって見る。戦争さえなかったら不幸にして病気で死ぬ人はあってもその他に人間同志で殺し合って死ぬ人々は無かったでしょう。(中略)戦争をすれば両方の国が互いに損をし、不幸な人を沢山作るだけであるのに何故にするのだろうか。経済的行きづまりや思想的行きづまりからだろうか？靖国神社へ参拝して、そして又私や私と同じきようぐうにある人や道端に立っている傷兵を見る度に、戦争は如何なる理由があっても絶対にはならないと云う事をひしひしと胸に感じた。」

〔第一集〕大阪市東淀川区、下村悦子

●「お父様はまだ生きていらつしやる、唯、南方に居られるだけなのだ」こうした考えは終戦八年の今も私の頭から去らない。お母様もそう考えていらつしやる。だから父の仏壇は田舎の御祖母様の家にほりつばなしであるし、お墓を見ても「死んでないのに。」と腹が立つ。私達はいつも陰膳をし、御父様の御健康をお祈りする。こう云う気持だから、靖国神社へ参拝する私の気持ちは複雑だった。」

〔第一集〕富田林市、浅井登世子

●「私の父も戦争のゴミの一つになり、祖国を守るために母や私

と弟二人をおいて、涙のうちに悲しくも父が出て行かれた時は、私は七才でした。(中略) ついに父親戦死の便りが終戦まもなく来ました。母の悲しみは大きくてがっかりしてしまいました。でも気の強い母は、なかに父の戦死はきつと間違いだと思い、其の後はまだ神様に祈るだけです。どんな寒い時にでも山の中にあるお滝で水に打たれて祈っていましたが、まもなく本当に戦死したと遺骨が帰って来ました。母の信仰も甲斐もなく消えてしまし、い、いくら気持の強い母も言葉に云い表せない程悲しみ、気のすむまで亡き父の遺骨をだきしめて泣きつづきました。」

〔第五集〕高槻市、久保ツル子)

●「父は私の三才の時に亡くなりました。(中略) 私は父とそっくりだそうです。お母さんから、お父さんの顔が見たかったら、自分の顔を鏡に写して見ればよいといわれるくらいです。無口な所、性質等もよく似ているそうです。父が戦場に行く日、私は母にだかれて、どんなに泣いた事でしょう。幼かった私にも父の行き先がわかっていたのではないのでしょうか。「お父ちゃん、お父ちゃん、行っちゃいやだあ」。何となくだめられても私は泣きつづけていました。けれども父は、汽車の窓から日の丸の旗をふって私から遠ざかって行ってしまいました。戦争はようしやなく幼い私の手から愛する父をうばい去ってしまいました。私は戦争がにくらしい、戦争がおそろしい。戦死された父や多くの人々は、もう二度と戦争が起らないよう願っていられるでしょう。私だってこのよう不幸が起らないように願っています。」

〔第五集〕大阪市旭区、熊谷勢津子)

●「ついに公報があり、父は十九年八月に戦死しておられた事が判った。でもなかなか本当に出来ず、引き上げられた戦友の家を

母に連れられてあちこちへ尋ねて行ったこともあった。どこに行っても本当に死なれた事を聞かされるたびに、母の前途は真暗であった。戦友のおじさんの話では、死ぬまで僕の服と靴を買ってリュックの中に入れ、背負っておられたとの事でした。内地は純毛が不自由だからと云って、ラバールで求められたらしく、土産に持って帰るのだと話しておられたそう。僕は今でもフィリピンに日本兵が残っていることをラジオなどでよく聞く事がある。その時はもしかして父ではないか、ひよつとしてまだ隠れておられるのではないかと思う事さえある。」

〔第五集〕豊中市、高橋正)

●「此の国が、神をたよりに今や、何百万と言う尊い人命を投げ捨て戦った。第二次大戦にやぶれさり、何百万と言う家族が苦しんで居る有様を見る時に、神国日本はどうしたのだろうか。果たして神があるものだろうか。決してないのです。私は信じます。神や仏は、苦しんで居る一個人を救うのが、神や仏の力ではないでしょうか。此の苦しんで居る日本国が今全国津々浦々から、何十万と言う遺族を国の費用で参拝させている事は何と言う事かと、なぜかざるを得ないでしょう。なぜならばこれは小善に過ぎないからです。日本の政治家は、もう少し一個人を救う道はないものかと言う事を考えるべきでしょう。」

〔第十集〕大阪市西成区、上久保証子)

●「靖国の鳥居を見た時、父に逢えるという喜びに胸一杯だった。しかしそのそこには誰が父を殺したか、それは戦争である。その戦争は誰がするのだ、日本国民を代表する人々ではないか。国のため国のためと、国民の苦勞をよそに尊い人命を赤紙一枚で左右する。国民はなにも知らない、罪はないのである。一部の権力者

の為に父を、いや数十万という人命を失ったのだ。僕は戦争を憎む。いやそれ以上に戦争を引き起こした政治家、軍人を憎む。父は永遠に帰らないのだ。母は戦後のどさくさに生活するため必死であった。その苦勞がたたってか僕の七つの時、母も父の後を追うて帰らぬ人となった。父母を殺したのはだれだ。政治家、軍人のまちがった政治、それにつきる。そんな心が胸の片隅で叫んだ。」

『第十二集』 大阪市東住吉区、川波正敏

●「僕の父が一体どこにいるのだ。健康な姿はどこに行ったのだろう。ただ大きな鳥居。門の様に閉ざされた（*本殿）正面の板戸、とりまくすべてがなつかしい父と僕との間を閉じている様である。僕は誰にもなく無暗に腹が立った。畜生、誰が父を殺したんだ。世界中で唯一人しかない立派な父を誰が海底に沈めたんだ。僕は無我夢中だった。辺りに誰が居ようが居まいが、おかまいなしにくやし涙がとめどもなく頬を伝った。然しこの相手の無い僕の憤りはすぐに云い知れぬさびしさに変わってしまった。広い靖国神社の玉砂利の中に、僕一人ぼんと取り残されたようなさびしさだった。（中略）鳥居の所まで出た僕は、わすれ物に気がついて二、三步引き返し、しゃがんで下の玉砂利を一にぎりポケットに入れた。」

『第五集』 南河内郡、中山高平

おわりに

『靖国文集』（大阪府）を読んでいくと、靖国神社遺児参拝の根源的批判をした私の「幻の少女」である川上孝子さんのことが

思い出されます。（「反天皇制市民一七〇〇（第三〇号）」彼女は二〇歳代後半で亡くなっています。七年前に彼女の弟さんを探しましたが、見つかりませんでした。『靖国文集』の読み取りが終わったことを機会にもう一度弟さんを探し、彼女がどういう人だったのかを聞いてみたいと思っています。また、私たちの世代も高齢になっていきますので、靖国神社遺児参拝の追跡も急がなければならぬと思います。最近、今井勇著『戦後日本の反戦・平和と「戦没者」／遺族運動の展開と三好十郎の警鐘』（御茶の水書房）が出版され、入手しました。戦後の戦没者遺族運動について勉強し直して見ようと思っています。

（二〇一七・一二・三）

